



## 『楚辞章句』 「卜居」 注の押韻

著者	田島 花野
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
号	23
ページ	1-16
発行年	2018-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00125950">http://hdl.handle.net/10097/00125950</a>

## 『楚辞章句』「卜居」注の押韻

田島 花野

### 1 はじめに

王逸<sup>1</sup>『楚辞章句』(以下『章句』と略称する)に関しては、『四庫全書総目提要』集部一・楚辞類が「九章」の「抽思」以下の注に押韻する箇所があると指摘しており<sup>2</sup>、浅野通有氏・竹治貞夫氏は、『章句』の注に散文と韻文の二系統の形式があること、さらに韻文形式は四言二句と四言一句とに区分できることに言及している<sup>3</sup>。

小南一郎氏は、「九章」(巻四)の「抽思」・「思美人」・「漁父」(巻七)・「遠遊」(巻五)・「離騷」(巻一)・「九歌」(巻二)の「東皇太一」等の注を例に挙げ、注釈の形式を手掛かりに『章句』の成立について詳細に論じている<sup>4</sup>。以下に、小南氏の説の概要を挙げる。

I形式：四字句で韻を踏む。王逸の注釈作業に先行して存在した。

Ia形式：本文一句に対し、四字句二句の注が付けられる。

Ib形式：本文一句に対し、四字句一句の注が付けられる。

<sup>1</sup> 王逸の生没年は不明であり、『後漢書』によれば、安帝の元初年間(114年～120年)に、上計吏となって都へ上り、校書郎に任じられ、順帝の治世(在位126年～144年)に、侍中に任じられた、という。『後漢書』卷八十上、文苑列伝第七十上「王逸字叔師、南郡宜城人也。元初中、舉上計吏、爲校書郎。順帝時、爲侍中。著『楚辞章句』、行於世。其賦・誄・書・論及雜文凡二十一篇。又作『漢詩』百二十三篇。」(中華書局、1965年)。また、蔣天樞『《後漢書・王逸傳》考釈』(蔣天樞『楚辞論文集』陝西人民出版社、1982年。初出は『中国歴史文獻研究集刊』2、1981年)を参照した。

<sup>2</sup> 『武英殿本四庫全書総目提要』(台湾商務印書館、1973年影印)「抽思」以下諸篇註中、往往隔句用韻、如「哀憤結鬱、慮煩冤也。」「哀悲太息、損肺肝也。」「心中結屈、如連環也。」之類。不一而足。蓋仿『周易』象傳之體、亦足以考證漢人之韻。」

<sup>3</sup> 浅野通有「『楚辞章句』における九弁の編次——王逸によって意図された経伝的構想——」(『国学院雑誌』71-7、1970年)5頁。竹治貞夫『楚辞研究』「楚辞の書物 第一章 楚辞の編集と章句」(風間書房、1978年)「楚辞の編集と章句」164～169頁。

<sup>4</sup> 小南一郎『楚辞とその注釈者たち』(朋友書店、2003年)「王逸『楚辞章句』と楚辞文芸の伝承」(「王逸『楚辞章句』をめぐって——漢代章句の学の一側面」『東方学報 京都』63、1995年を改訂)300～326頁。中国語版は、小南一郎著、張超然訳「王逸『楚辞章句』研究——漢代章句学の一側面」(『中国文哲研究通訊』11-4、2001年)。

Ⅱ形式：基本的に韻を踏まず、厳格には四字句の形態も取らない。王逸自身の注釈である<sup>5</sup>。

王逸の楚辞学は、中央の知識人的な楚辞学を承けるⅡ形式の注と、楚文化圏での楚辞伝承を引き継いだⅠ形式の注の、二つの流れを総合したものである<sup>6</sup>。

以上のような小南氏の説に対し、白馬氏は「九章」の「惜往日」・「哀郢」と「漁父」を分析し、王逸によって散文形式の注が付された後、2世紀から5世紀晚期までの間に韻文形式の注が増補されたとの見解を示す<sup>7</sup>。

他方で、陳鴻図氏は韻文形式の注の押韻を考察し、おおむね兩漢の特色を有すると指摘する。中でも「招隱士」（卷十二）注において魚部麻韻の字「家」・「華」が合用される例は、前漢にのみ出現する現象であり、複数の作品の注に見える陽部と耕部の合韻例は、詳しく見ると後漢の押韻形式のようである、とする<sup>8</sup>。

また、魯瑞菁氏は「九章」の「哀郢」・「涉江」を分析し、王逸『章句』は先行する韻文形式の注を参考にしながらも、基本的には散文形式で注を付したものであり、当時は本文と各種の注がそれぞれ単独で流布していたが、散逸と後人による増補、および本文と注を統合する編集を経た結果、韻文形式の注と散文形式の注が混ざり合い、体裁が混乱した今日の『章句』の形になったとする<sup>9</sup>。

さらに、黄耀堃氏は「漁父」について『史記』所収の本文・『章句』所収の本文・韻文形式の注の三者を比較し、『史記』所収の本文の方が原本に近いこと、韻文形式の注は『史記』所収の本文に対して付されていること、注が王逸以前に遡る可能性があることを指摘する<sup>10</sup>。

上記のように、小南氏の提起の後、『章句』の注に関する議論が続いている<sup>11</sup>。「九章」の「哀郢」や「漁父」など何篇かの作品については、白馬氏・魯氏・黄氏によって比較的詳細な検討が行われているが、未検討の作品も多く、『章句』全体の検証には至っていない。押韻に関しては、陳鴻図氏が成立年代を判定するのに有効な押韻例を挙げているものの、一篇の作品に付さ

<sup>5</sup> 前掲小南著 306 頁、310 頁、320 頁。

<sup>6</sup> 前掲小南著 349～350 頁。

<sup>7</sup> [德国] 白馬著、張慧文訳「不同的評注 不同的評注者——以《楚辞章句》の多樣化評注爲基礎試探本書成書の經過」（『中国楚辞学』9、2007 年）123～124 頁。この論文には原著の情報が記されていないが、陳鴻図「《楚辞章句》韻文注的時代」（『中国楚辞学』16、2011 年）285 頁によれば、原著は「Michael Schimmelpfennig *Qu Yuan's Transformation from Realized Man to True Poet: The Han-dynasty commentary of Wang Yi to the Lisao and the Songs of Chu*. Thesis (PhD) - University of Heidelberg, 1999, pp. 1-pp. 835」である。

<sup>8</sup> 前掲の陳鴻図論文 290～293 頁。

<sup>9</sup> 魯瑞菁「由《楚辞》在漢晉南朝的傳播論《楚辞章句》韻體積文的生成」（『中国楚辞学』22、2015 年）260 頁。

<sup>10</sup> 黄耀堃「《漁父》の韻文注——《楚辞章句》韻文注研究之一」（『中国楚辞学』23、2016 年）46 頁。

<sup>11</sup> 以上のほか、陳松青「王逸注解《楚辞》の文学視角——《楚辞章句》之“八字注”探析」（『中国文学研究』（湖南師範大学）2003-1）、查屏球「文学的闡釋与闡釋的文学——关于王逸《楚辞章句》韻体注文的考論」（『文学評論』2008-2）、施盈佑「再探王逸《楚辞章句》之注釈型態」（『淡江人文社会学刊』38、2009 年）等が発表されている。

れた注を詳細に検討したものではない。先行研究で未検討の作品に対しても、考察を進める必要があろう。

そこで、本稿では「卜居」（巻六）の全篇を対象として、注の押韻状況を検討する。「卜居」に関して、前掲の小南氏は、次のように指摘している。

・本文とIb形式の注とを一つにして読めば、Ia形式の注と同じ形態の韻文となる<sup>12</sup>。

・I形式の注釈は、楚辞の本文と一体不可分な関係にあった。

「恐らくは、こうした注釈の文章は、本文と一続きにして朗誦されたのであろう。」<sup>13</sup>

・Ib形式の注が付されているのは、「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隠士」の四篇のみである。「遠遊」・「招隠士」ではIb形式の注は一部分に見られるだけだが、「これまでも一対をなす作品と考えられてきた」「卜居」・「漁父」では、Ib形式の注が多用されており、「その注釈もまた他から孤立して独特の形態を取っている」。

・上記四篇は道家・神仙思想と密接な関わりを持っている。淮南王劉安を中心とする集団の中での道家思想の展開と関係を持ちつつ形成されたものか。

・上記四篇の注も、神仙・道家思想を強力に宣伝している。

・I形式の注は、その本文と同時に作られたとまでは言えないまでも、本文と切り離せないものとして伝承されていた。<sup>14</sup>

また白馬氏は、『楚辞釈文』<sup>15</sup>（以下『釈文』と略称）の篇次が、現行『章句』の篇次よりも原始性を有するとしており、上記四篇に関しては、道教的な背景を持ち韻文形式の注が付され、『釈文』で巻六「遠遊」、巻七「卜居」、巻八「漁父」、巻九「招隠士」とひとまとまりに配置されている点を指摘する<sup>16</sup>。白馬氏の指摘は、小南氏の四篇に関する説を補強するものと言えよう。

小南氏の説は興味深いものであるが、「Ib形式の注が付されている」と指摘する「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隠士」の四篇のうち、具体的に例を挙げて論じているのは「漁父」と「遠遊」

<sup>12</sup> 前掲小南著 305～306 頁より『章句』巻七「漁父」の冒頭五句を転載する。注の押韻字はゴシック体で表記する。

屈原既放	屈原は既に放たれ	(注) 身斥逐也	身は斥逐せらるるなり
遊於江潭	江潭に遊び	(注) 戲水側也	水側に戯(たわむ)るなり
行吟汨畔	汨畔に行吟す	(注) 履荊棘也	荊棘を履むなり
顔色憔悴	顔色は憔悴し	(注) 奸黷黑也	奸黷して黒ずむなり
形容枯槁	形容は枯槁す	(注) 癯瘦瘠也	癯して瘦瘠するなり

<sup>13</sup> 以上は、前掲小南著 306～307 頁。

<sup>14</sup> 以上は、前掲小南著 316 頁。

<sup>15</sup> 『釈文』の篇次は、南宋の洪興祖『楚辞補注』の目録に引用される形で伝わる。竹治氏前掲書「楚辞の書物 第三章 楚辞釈文の撰者とその内容」(初出は「楚辞釈文の撰者について」『日本中国学会報』18、1966 年) 209～251 頁は、『釈文』は一般に南唐の王勉が撰したとされるが、唐の陸善経の撰であろうと述べる。

<sup>16</sup> 白馬「関于《楚辞章句》評注類型研究的研究目標」(『中国楚辞学』18、2011 年) 164～166 頁。

の一部に限られる。本稿の目的は「卜居」全篇において、小南氏による韻文形式の注が「本文と一続きにして朗誦された」という説に従った場合、どのような現象が生じるのかを検討することにある。

## 2 押韻の判定について

『楚辞』本文および注については、黄靈庚『楚辞章句疏證』（中華書局、2007年。以下、黄著と略称）を底本とする<sup>17</sup>。黄著は注の押韻について以下のように指摘する（第一冊凡例2頁）。

章句釋義，偶用韻語，爲其所創制。四庫館臣「蓋仿周易象傳之體」云云，未必可信。計其用韻語者，有九辯、抽思、思美人、惜往日、悲回風、遠遊、卜居、漁父、招隱士、九懷等十篇。據其用韻，不啻可以校章句之訛誤，義脫，又爲考證音韻流變之佐證。審其用韻，皆後漢時世之音，不盡與三百篇、楚辭同也。自周秦至後漢，越歷數百年，則其音又爲一變。如陽韻之明、行、英等字，章句用韻多與耕、青韻相協，支、歌、脂、微四韻，侯、魚、幽三韻，其畛域亦不甚密。是書皆據例詳說之。惟其韻目，復因曾運乾周秦古韻三十部說。於入韻之字分合之間，比較折中，則可以推知其音變消息也。

『章句』は意味を解釈するのに、たまたま韻文を用いており、『章句』が創り出したものである。『四庫全書』編集者が「おそらく『周易』象伝の体裁に倣ったのであろう」云々としたのは、信じられるとは限らない。『章句』が韻文を用いている作品を数えると、「九辯」・「抽思」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」・「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隱士」・「九懷」など十篇ある。これらの篇の押韻を拠り所にすれば、ただ『章句』の誤字・衍字脱字を校正できるのみならず、音韻が変化した証拠を考証することもできる。押韻を詳しく見てみると、みな後漢時代の音で、『詩経』三百篇や『楚辞』と全てが一致する訳ではない。周・秦から後漢に至るまで、数百年を経ているため、音も一変している。陽韻の「明」・「行」・「英」等の字は、『章句』の押韻では多く耕韻・青韻と協韻しており、支・歌・脂・微の四韻や、侯・魚・幽の三韻は、その境界もあまり厳密ではない。本書はみな例に依拠して詳

<sup>17</sup> 王逸『楚辞章句』（明正徳十三（1518）年、黄省曾校、大阪大学蔵）、王逸『楚辞章句』（明万曆十四（1586）年、馮紹祖親妙齋刊、芸文印書館、1974年影印）、王逸『楚辞章句』（日本寛永三（1750）年、莊允益校、大阪大学蔵）、洪興祖撰『楚辞補注』（四部叢刊初編）、洪興祖撰・黄靈庚点校『楚辞補注』（上海古籍出版社、2015年）、『尤袤刻本文選』（国家図書館出版社、2017年影印）、『日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、2008年影印）、『奎章閣所藏六臣注文選』（도서출판 다운샘、1996年影印）を参照した。

述している。韻目は、曾運乾（引用者注：1884 年-1945 年）の周秦古韻三十部説に因るために、韻目に入る字の分け方が、かなり折中的なので、その音が変化した手掛かりを推測することができる<sup>18</sup>。

黄著は、上記の「九弁」・「抽思」など十篇の注釈について「これらの篇の押韻を拠る所になれば、…『章句』の誤字・脱字を校正できる」と述べる。本文のある一句に付された注に関して、前後の注と押韻することを前提とし、現行の語句が押韻していない場合は、諸本を校勘して押韻する語句を選択し、『章句』の本来の形である「舊」・「舊本」を復元できるとする。しかし、本稿がこの復元に依拠して押韻を検討すると、循環論法に陥りかねない。とはいえ、十篇の注釈がおおむね押韻するという現象は肯定できる。また、誤脱が少なからずある現行の諸本に依拠して押韻を検討するのは困難である。それゆえ本稿は黄著に拠った<sup>19</sup>。

本文の押韻については、王力『詩経韻読 楚辞韻読』<sup>20</sup>を参照する。本文と注の押韻に関しては、羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』<sup>21</sup>（以下、羅著と略称）の「兩漢詩文韻譜」（以下、「兩漢韻譜」と略称）を用いる。「兩漢韻譜」は『章句』に関して、漢人の作とされる七篇、すなわち卷十一の賈誼（前 200～前 168）「惜誓」から卷十七の王逸「九思」までを収録している。もとより卷十二の淮南小山（生卒年不明）「招隱士」を含む。卷六「卜居」は、卷五「遠遊」・卷六「漁父」とともに『章句』では屈原の作とされており、「兩漢韻譜」の対象ではない。本稿が「卜居」の注のみならず本文に関しても、「兩漢韻譜」で判定することには、異議を持つ向きもおられるかもしれない。

しかし、前掲した白馬氏の指摘を踏まえると、「遠遊」・「卜居」・「漁父」・「招隱士」の四篇は、ひとまとまりの作品群となる。四篇の本文の成立年代は、戦国時代の古い作品群と漢代の新しい作品群との中間に位置すると考えられる。本稿では、四篇を戦国時代と漢代の間の過渡期の作品として、便宜上「兩漢韻譜」を適用する。

羅著の「兩漢韻譜」は、兩漢音を、『詩経』音の三十一部から変化した以下のような二十七部

<sup>18</sup> 黄著は、押韻字の声調には言及していない。

<sup>19</sup> 前掲した陳鴻図氏・魯瑞善氏・黄耀堃氏の研究も、黄著に拠ったものである。

<sup>20</sup> 王力『詩経韻読 楚辞韻読』（『王力文集』6、山東教育出版社、1986 年。中国人民大学出版社、2004 年）。同書「楚辞韻読」は、「離騷」から「大招」までを対象として、漢人の作品を除外している。なお、王力『漢語語音史』（中国社会科学出版社、1985 年）は「漢代音系（前 206—公元 220）」として、二十九韻部を示す。漢人の『楚辞』作品を収録するが、前漢と後漢を区別しておらず、押韻の挙例も少数である。

<sup>21</sup> 羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』（第 1 分冊、科学出版社、1958 年。中華書局、2007 年）。なお、合韻の例数は、同書 46～47 頁の西漢韻部の表および 56～57 頁の東漢韻部の表を参照した。これらの表は、124～245 頁「兩漢韻譜」の二部合韻を集計したものである。しかし、「兩漢韻譜」の合韻例数とは合致しない箇所があり、その場合は「兩漢韻譜」の例数に従った。

に分類する。

陰聲類 之、幽、宵、魚\*<sup>22</sup>、歌\*、支\*、脂、祭

陽聲類 蒸、冬、東、陽\*、耕\*、真、元、談、侵

入聲類 職、沃、葉、屋、鐸、錫、質、月、盍、緝

羅著は聲調を跨ぐ押韻について、次のように述べる（67頁）。

如果我們本着前人分析《詩經》押韻的辦法來研究兩漢的韻文，很容易可以看到漢人對聲調的分別一般是很細緻的。平聲字和上聲字跟入聲字在一起押韻的極少見。去聲字和入聲字在一起押韻的爲數也不多，而且只限於少數幾部字。平聲與上聲，上聲與去聲相押的雖然有一些，但也不很多。因此我們在研究漢代韻文的押韻的時候，不能不分辨四聲。

もし我々が、先人が『詩經』の押韻を分析した方法に基づいて兩漢の韻文を研究すれば、漢人の声調に対する区別は一般的に精密なものであるということを見取ることができる。平聲の字と上聲の字が入聲の字と一緒に押韻することは極めて珍しい。去聲の字と入聲の字と一緒に押韻する数も多くなく、しかも少数の何部かの字に限られる。平聲と上聲、上聲と去聲が押韻する例は幾らかあるが、あまり多い訳ではない。それゆえ我々は漢代の韻文の押韻を研究する時、四聲を分けない訳にはゆかない。

以上の引用部分の中で羅著は、平声と去声の押韻には触れていない。平声と去声の問題については後述する。

### 3 「ト居」の押韻状況

「ト居」本文と注に句番号を付し、適宜第一段から第四段に分けた。

以下ゴシック体が考察対象の字である。「/」は複数の声調や韻部に属する場合に、「?」は「兩漢韻譜」に記載を確認できず韻部を確定できない場合に付す。「\*」は前漢と後漢で部が異なる場合に付し、例えば「陽部\*耕部」は前漢では陽部に、後漢では耕部に属することを示す。

「A」等は本文同士の押韻、「a」等は注同士の押韻、「○」は本文同士および注同士で無韻の字、「▲」は本文同士の換韻箇所および注同士の換韻箇所、下線部は声調を跨いで押韻する可能性のある部分である。

<sup>22</sup> 「\*」は前漢と後漢で差異があり、韻字表が前漢と後漢に分かれている部である。前漢と後漢の韻部の変化については羅著 13～14 頁、20～28 頁、34～35 頁を参照。

## 第一段

- 01 屈原既放三年、(平声真部○) **注**遠出郢都、(平声魚部○) 處山林也。(平声侵部 a)
- 02 不得復見。(去声元部○) **注**道路僻遠、(上声/去声元部○) 所在深也<sup>23</sup>。(平声侵部 a)
- 03 竭知盡忠、(平声冬部○) **注**建立策謀、(平声之部○) 披胸心也<sup>24</sup>。(平声侵部 a) ▲
- 04 而蔽郵於讒。(平声談部○) **注**遇諂佞也。(去声耕部 b<sup>25</sup>)
- 05 心煩慮亂、(去声元部○) **注**慮憤悶也。(去声真部? b)
- 06 不知所從。(平声東部○) **注**迷瞽眩也<sup>26</sup>。(平声真部?元部?/去声元部? b) ▲
- 07 往見太卜、(入声屋部○) **注**稽神明也。(平声陽部\*耕部 c<sup>27</sup>)
- 08 鄭詹尹、(上声真部○) **注**其姓名也。(平声耕部 c)
- 09 曰「余有所疑、(平声之部A) **注**意惑違也<sup>28</sup>。(平声陽部 c) ▲
- 10 願因先生決之。」(平声之部A) ▲ **注**斷吉凶也。(平声東部 d)
- 11 詹尹乃端策拂龜、(平声幽部 B<sup>29</sup>) **注**整儀容也。(平声東部 d) ▲
- 12 曰「君將何以教之。」(平声之部B) ▲ **注**願聞其要<sup>30</sup>。(平声宵部○)

まず、本文同士の押韻はどうか。末尾の四句 9・10 と 11・12 は、登場人物の言葉を主体とする。四句は、毎句韻「AA」「BB」の形式で押韻する。「A(之部)」と「B(幽之合韻)」を分けたが、両者は極めて近い音である。これ以外の、地の文に当たる部分は無韻である。

注同士の押韻については、声調を跨いで押韻する可能性のある部分が一箇所ある。04「佞」・

<sup>23</sup> 黄著「道路僻遠、所在險也。文選本「險」作「深」。案：據章句用韻，舊本作「深」。(第三冊 1861 頁。以下、第三冊の場合は特に記さない)。

<sup>24</sup> 黄著「建立策謀、披心胸也。文選本「建立策謀披心胸」作「建立策謀披心胸」，(中略)作「披心胸」，胸字出韻。(中略)舊作「建立策謀披心胸」(1862 頁)。

<sup>25</sup> 羅著、耕部と真部の合韻は、前漢に 11 例、後漢に 12 例。前漢は耕真合韻 7 例(平声：196~197 頁)、真耕合韻 4 例(平声：204 頁)、後漢は耕真合韻 5 例(平声：197 頁)、真耕合韻 7 例(平声 6 例、去声 1 例：206 頁)。以下に 06 王注「眩」が元部であった場合の合韻例を示す。耕部と元部の合韻例はない。真部と元部の合韻は、前漢に 51 例、後漢に 102 例。前漢は真元合韻 39 例(平声 34 例、上声 2 例、去声 3 例：203~204 頁)、元真合韻 12 例(平声 10 例、去声 2 例：211 頁)、後漢は真元合韻 63 例(平声 60 例、上声 1 例、去声 2 例：203~204 頁)、元真合韻 39 例(平声 35 例、去声 4 例：212 頁)。耕・真・元三部の合韻は、後漢に平聲の耕真元合韻が 1 例ある(198 頁)。

<sup>26</sup> 黄著「迷所著也。文選本作「迷瞽眩也」。(中略)案：若作「迷所著也」，著字出韻。舊作「迷瞽眩」。(1863 頁)。

<sup>27</sup> 羅著、07 王注「明」は前漢では平声陽部に、後漢では平声耕部に属する。前漢の陽部と耕部の合韻は 13 例あり、陽耕合韻は 5 例(平声：188 頁)、耕陽合韻は 8 例(平声 5 例、去声 3 例：196 頁)。後漢では陽部と耕部の合韻は 46 例あり、陽耕合韻は 38 例(平声：188~189 頁)、耕陽合韻は 8 例(平声 7 例、去声 1 例：197 頁)。前掲の陳鴻圖論文(291 頁)は、「卜居」注に陽部と耕部の同用が 2 例あるとし、1 例目として 07「明」(陽部唐韻) (引用者注：「明」は「庚韻」)・08「名」(耕部清韻)・09「違」(陽部唐韻)を挙げ、「陽耕同用」とする。2 例目は 57~59 句目である。

<sup>28</sup> 黄著「意違惑也。文選本「惑惑」作「惑違」。案：若作「意違惑」，惑字出韻。則舊作「意惑違」也。(1865 頁)。

<sup>29</sup> 羅著、之部と幽部の合韻は前漢に 11 例、後漢に 26 例。前漢は之幽合韻 8 例(130 頁)、幽之合韻 3 例(136 頁)あり、後漢は之幽合韻 14 例(131 頁)、幽之合韻 12 例(137 頁)。

<sup>30</sup> 黄著「案：章句「願聞其要」云云，要字出韻，且不合章句三字句韻語例，後所竄亂。」(1866~1867 頁)。黄氏の指摘は妥当であるが、韻字を用いた別本が見当たらないため、暫時本文のママとする。



05「悶」・06「眩」は、05「悶」と06「眩」の韻部が確定していないが、まず05「悶」が去声真部であると仮定する。06「眩」は、『大宋重修広韻』（以下『広韻』と略称）では下平声一先と去声三十二霰に属す。『広韻』の平声先韻は、『兩漢韻譜』で平声真部に属する「玄」・「鉉」・「弦」を収める。よって06「眩」は、平声真部に属する可能性が高いと考えられる。06「眩」が平声真部ならば、04～06は、去声と平声を跨いだ耕真合韻となる。ただし、第二章で述べたように、羅著は平声と去声の合韻には言及していない。

本文と注の関係には、次のような特徴が見られる。

第一に、I a 形式の注とI b 形式の注の境目について述べる。小南氏によれば、「遠遊」では、本文一句に対し四字二句を費やすI a 形式の注が、本文の一般的な叙事の部分に付されるのに対し、四字一句のみのI b 形式の注は、王子喬の言葉、すなわち神仙の聖なる教えに対して付される、という使い分けがなされるという<sup>31</sup>。「卜居」においては、本文冒頭の叙事の部分にI a 形式の注が付され、一見「遠遊」の使い分けと軌を一にするようだが、叙事の途中の04でI b 形式の注に切り替わる。以後は12に至るまで、叙事の部分と登場人物の言葉とを問わず、I b 形式の注が付されている。「遠遊」に見えるようなI a 形式とI b 形式の使い分けは、「卜居」においては認められない。

第二に、I a 形式とI b 形式の違いについて述べる。四字二句のI a 形式は、本文一句につき八字を費やすことができる。01を例に挙げれば、本文「屈原既に放たれて三年（屈原既放三年）」に対し、注には「遠く郢都を出で、山林に處るなり。（遠出郢都、處山林也。）」とあり、「郢都を出で」・「山林に處る」のように本文にはない内容が付加されている。そのため、01～03注は、一作品と見做して単独で朗読しても、さほど違和感がない。

対照的に、I b 形式は四字句一句であり、本文一句に対し四字のみである。第一段の04以降と、後に示す第三段以降は全てI b 形式の注が付いている。07～09を例に取れば、本文「往見太卜、鄭詹尹、曰『余有所疑』」に対し、注は「稽神明也。其姓名也。意惑違也」である。本文と密接に関わる解説であって、注単独では意味を成さない。もちろん単独で朗読することは可能であるが、I a 形式のように独立した一作品として見ることは困難である。

I b 形式の注は、小南氏の説のように、本文と組み合わせて朗読してはじめて意味を持つ。もとよりI a 形式を本文と組み合わせて朗読することは可能である。では、本文と注を組み合わせ朗読した場合に、どのような現象が生じるか、以下の第三と第四に分けて示す。

<sup>31</sup> 前掲小南著 307～310 頁。

第三に、注同士は基本的に押韻するため、仮に本文が無韻であっても、隔句押韻となりうる。「本文と（引用者補：I b 形式の）注とを一つにして読めば、（中略）そのまま I a 形式の注と同じ形態の韻文となるのである。（中略）恐らくは、こうした注釈の文章は、本文と一続きにして朗誦されたのであろう。」（前掲小南著 306～307 頁）との指摘通り、例えば注が I b 形式の 07・08 は「本文と一続きにして朗誦」すれば、「往見太ト (○)、稽神明 (c) 也。鄭詹尹 (○)、其姓名 (c) 也。」となる。また、注が I a 形式の 01～03 でも本文と注を一続きにして読めば、「屈原既放三年 (○)、遠出郢都 (○)、處山林也 (a)。不得復見 (○)、道路僻遠 (○)、所在深也 (a)。竭知盡忠 (○)、建立策謀 (○)、披胸心也 (a)。」となる。04～06、07・08 も同様である。

第四に、注の換韻と本文の換韻は一致しない部分が一箇所ある。注は 09「遑」で換韻するが、本文は 10「之」で換韻する。<sup>32</sup>

## 第二段

- 13 屈原曰、（入声月部?○）注吐詞情也。（平声耕部 a）  
 14 「吾寧惴惴、（上声真部?○）注志純誠也<sup>33</sup>。（平声耕部 a）▲  
 15 朴以忠乎。（平声冬部 A）注竭誠信也。（平声/去声真部<sup>34</sup> b<sup>35</sup>）  
 16 將送往勞來、（平声之部○）注追俗人也。（平声真部 b）  
 17 斯無窮乎。（平声冬部 A）▲注不困貧也。（平声真部 b）  
 18 寧誅鋤草茅、（平声幽部○）注刈蒿菅也。（平声元部? b）▲  
 19 以力耕乎。（平声耕部 B）注種稼穡也。（入声職部? c<sup>36</sup> d<sup>37</sup>）<sup>38</sup>  
 20 將游大人、（平声真部○）注事貴戚也。（入声沃部 c）  
 21 以成名乎。（平声耕部 B）▲注榮譽立也。（入声緝部 e<sup>39</sup> d）<sup>40</sup>

<sup>32</sup> 11 王注「容」と 12 本文「之」も換韻が異なるように見える。しかし、黄著によれば、12 王注「要」字は無韻で本来の形を失っているという。「要」は 11 王注「容」と押韻する別の字であったかもしれない。そうだとすれば、注の本来の換韻箇所は 12 に位置し、本文の換韻と一致していた可能性が残るため、換韻が異なるとは断言できない。

<sup>33</sup> 黄著「志純一也。文選六臣本作「志純也」，尤袤本、胡本作「志純一也」。案：若作「純一」，出韻。（中略）據義，「志純」下當補「誠」字，舊作「志純誠」。純誠，古之習語。（後略：以下「純誠」の用例を列挙する）」（1868 頁）。

<sup>34</sup> 15 王注「信」について、『広韻』は去声のみ収録するが、羅著は真部に平声と去声を収録する（198 頁）。

<sup>35</sup> 真部と元部の合韻は、注 25 を参照。「卜居」の 04 王注「侯」への付注である。

<sup>36</sup> 羅著、職部と沃部の合韻は、前漢に 4 例、後漢に 3 例。前漢は職沃合韻 2 例（220 頁）、沃職合韻 2 例（223 頁）、後漢は職沃合韻 2 例（221 頁）、沃職合韻 1 例（221 頁）。

<sup>37</sup> 羅著、職部と緝部の合韻は、前漢に 6 例、後漢に 8 例。前漢は職緝合韻 5 例（220 頁）、緝職合韻 1 例（241 頁）、後漢の 8 例は職緝合韻（221 頁）。

<sup>38</sup> 王注 19「穡」～35「澤」計十七字は屋職沃藥鐸緝合韻（計六部）。このように多数の入声韻部が合韻する例を「両漢韻譜」で探すと、韻部の数が最も多いのは後漢の関名「費鳳碑」の職沃屋緝藥月質合韻（計七部）十八字（222 頁）、これに次ぐのは王逸「九思（憫上）」の屋沃藥鐸魚合韻（計五部）十二字（228 頁）である。王注 19～35 では、二つの韻部の間での合韻状況を確認するために、一つの韻字に対して「a」「b」等の記号を複数付す場合がある。

<sup>39</sup> 羅著、緝部と鐸部の合韻は、前漢に 0 例、後漢に 2 例。後漢の 2 例は鐸緝合韻（231 頁）。

<sup>40</sup> 黄著「章句以上穡、成、立協韻。穡，職韻；成，覺韻；立，緝韻。職、覺、緝合韻。周、秦用韻，職、緝合韻，然無

- 22 寧正言不諱、(去声脂部C) 注諫君惡也。(入声鐸部 e f<sup>41</sup> g<sup>42</sup>)
- 23 以危身乎。(平声真部D<sup>43</sup>) 注被刑戮也。(入声沃部 h<sup>44</sup> l)
- 24 將從俗富貴、(去声脂部C) 注食重祿也。(入声屋部 h i<sup>45</sup> g)
- 25 以媮生乎。(平声耕部D) ▲ 注身安樂也。(入声葉部 i j<sup>46</sup>)
- 26 寧超然高舉<sup>47</sup>、(上声/去声魚部O) 注讓官爵也。(入声葉部 i j)
- 27 以保真乎。(平声真部E) 注守玄默也。(入声職部 k<sup>48</sup> j)
- 28 將呢訾栗斯、(平声支部F) 注承顏色也。(入声職部 k j)
- 29 喔咻儒兒、(平声支部F) 注強笑嚙也。(入声鐸部? k g/葉部? j l<sup>49</sup>)
- 30 以事婦人乎。(平声真部E) ▲ 注訕蜷局也<sup>50</sup>。(入声屋部 g l)
- 31 寧廉潔正直、(入声職部O) 注志如玉也。(入声屋部 g l)
- 32 以自清乎。(平声耕部B) 注修潔白也。(入声鐸部 g)
- 33 將突梯滑稽、(平声脂部C) 注轉隨俗也。(入声屋部 g)
- 34 如脂如韋、(平声脂部C) 注柔弱曲也。(入声屋部 g)
- 35 以潔楹乎。(平声耕部B) ▲ 注順滑澤也。(入声鐸部 g) ▲

本文同士の押韻を見る。隔句の四句二韻 14~17「〇A〇A」と18~21「〇B〇B」、毎句韻 22~25「CD CD」、隔句と毎句の組み合わせ 26~30「〇E F F E」と31~35「〇B C C B」のように、相似形が反復する。これらのうち、「CD CD」・「〇E F F E」・「〇B C C B」は、韻字が多く、緊密で複雑な押韻形式である。このような複雑な押韻形式は、第一段・第三段・第四段には見られない。

注同士の押韻はどうか。19~35の計十七句は入声が連続し、屋職沃葉鐸緝合韻を形作る。これまで検討した第一段・第二段、および後述の第三段・第四段を含めても、19~35以外の箇所

與覺韻合用例、後漢覺與緝、職合韻、則其音變矣。」(1871頁)。羅著の音韻体系において緝の職部・戚の沃部・立の緝部が合韻する例は、19注「緝」前掲の職沃屋緝葉月質合韻(計七部)十八字(222頁)の一部としてであり、三部のみの合韻例は無い。

<sup>41</sup> 羅著、鐸部と沃部の合韻は、前漢に0例、後漢に1例。後漢の1例は鐸沃合韻(231頁)。

<sup>42</sup> 羅著、鐸部と屋部の合韻は、前漢に4例、後漢に3例。前漢は鐸屋合韻4例(230頁)、後漢は鐸屋合韻3例(230頁)。

<sup>43</sup> 耕部と真部の合韻は、注25を参照。「卜居」の04王注「侯」への付注である。

<sup>44</sup> 羅著、沃部と屋部の合韻は、前漢に6例、後漢に7例。前漢6例は屋沃合韻(227頁)、後漢7例は屋沃合韻(227~228頁)。

<sup>45</sup> 羅著、葉部と屋部の合韻は、前漢に2例、後漢は0例。前漢の2例は屋葉合韻(227頁)。

<sup>46</sup> 羅著、葉部と職部の合韻は、前漢に1例、後漢2例。前漢1例は葉職合韻(225頁)、後漢2例は葉職合韻(225頁)。

<sup>47</sup> 羅著「『舉』韻書作上聲、漢代有去聲一讀。」(68頁)。

<sup>48</sup> 羅著、職部と鐸部の合韻は、前漢に2例、後漢に4例。前漢2例は職鐸合韻(221頁)、後漢4例は鐸職合韻(231頁)。

<sup>49</sup> 葉部と屋部の合韻は、前漢に2例あるのみ。注45を参照。「卜居」の24王注「祿」への付注である。

<sup>50</sup> 黃著は30王注「局」を押韻字としていない(1879~1880頁)。脱字とみられる。

に入声韻は無く、また十七句連続押韻のような長大な韻も見られない。「卜居」全体では、一韻の長さは、二句二韻から五句五韻が標準である。

本文と注の関係には、次のような特徴が見受けられる。

第一に、注と一続きに朗誦した場合はどのようなになるか。本文には 22~25「C D C D」や 26~30「O E F F E」のように複雑な押韻形式が見られた。一般的に、本文の押韻は本文のみ朗誦した場合に効果的だが、注と一続きに朗誦すると本文の押韻の印象は薄れ、注の押韻の印象が強まる。本文「O E F F E」のような部分は、それ自体が複雑な押韻形式を持つ。26~30 を注と一続きに朗誦すれば、「寧超然高舉(O)、讓官爵也(入声)。以保真乎(E)。守玄默也(入声)。將呢嚳栗斯(F)、承顔色也(入声)。喔咻儒兒(F)、強笑嚳也(入声)。以事婦人乎(E)。訕螭局也(入声)。」となる。本文の押韻は、注と一続きに朗誦すると十分な効果を発揮できない。

第二に、本文の叙事と登場人物の言葉との境目と、注の換韻箇所は一致しない。本文は 13「屈原曰」が叙事の部分で、14以降は屈原の言葉となる。注は、13「屈原曰」にも付き、なおかつ 13・14 で押韻する。そのために、境目が一致しないのである。

第三に、本文の換韻と注の換韻は、一致する箇所と一致しない箇所とがある。本文は 17「斯無窮乎」で切れるのに対し、注は 18「刈蒿菅也」で区切れており一致しない。一方で 35 は本文・注ともに換韻箇所となっており、一致する。また、本文が 21「名」・25「生」・30「人」で換韻するのに対し、注は 19 から 35 まで十七句連続押韻となっており、本文への同調を見出し難い。

### 第三段

36 寧昂昂、	(平声陽部○)	<u>注</u> 志行高也。	(平声宵部 a <sup>51</sup> )
37 若千里之駒乎。	(平声魚部A)	<u>注</u> 才絕殊也。	(平声魚部 a) ▲
38 將汜汜、	(平声侵部?○)	<u>注</u> 普愛衆也。	(平声冬部○ <sup>52</sup> )
39 若水中之鳧乎。	(平声魚部A)	<u>注</u> 羣戲遊也。	(平声幽部 b <sup>53</sup> )
40 與波上下、	(上声魚部*歌部 <sup>54</sup> ○)	<u>注</u> 隨衆卑高 <sup>55</sup> 。	(平声宵部 b)

<sup>51</sup> 羅著、宵部と魚部の合韻は、前漢に 7 例、後漢に 14 例。前漢は宵魚合韻 2 例(平声: 140 頁)、魚宵合韻 5 例(平声 4 例、去声 1 例: 149 頁)、後漢は宵魚合韻 5 例(平声: 140~141 頁)、魚宵合韻 9 例(平声 5 例、上声 4 例: 151 頁)。

<sup>52</sup> 38 王注「衆」(冬部)は、羅著に従えば、前漢・後漢ともに冬部と宵部、冬部と魚部、冬部と幽部の合韻例がないため、押韻と見なすのは困難であろう。黄著は「章句以上衆、遊協幽韻; 衆, 冬韻, 幽之陽(引用者注: 陽声の冬部は陰声の幽部と主母音が共通である)也。遊, 幽韻。」とする(1881 頁)。

<sup>53</sup> 羅著、幽部と宵部の合韻は、前漢に 18 例、後漢に 17 例。前漢は幽宵合韻 15 例(平声 7 例、上声 8 例: 136 頁)、宵幽合韻 3 例(平声 2 例、去声 1 例: 140 頁)、後漢は幽宵合韻 12 例(平声 6 例、上声 4 例、去声 2 例: 136~137 頁)、宵幽合韻 4 例(平声 3 例、上声 1 例: 140 頁)。

<sup>54</sup> 羅著、40 本文「下」は前漢では上声魚部、後漢では上声歌部に属する。

- 41 偷以全吾軀乎。(平声魚部A) ▲ 注身免患憂<sup>56</sup>。(平声幽部 b) ▲
- 42 寧與騏驎亢軛乎。(入声錫部B) 注冲天驅也<sup>57</sup>。(平声魚部/去声魚部 c<sup>58</sup>)
- 43 將隨駑馬之迹乎。(入声錫部B) ▲ 注安步徐也<sup>59</sup>。(平声魚部 c)
- 44 寧與黃鵠比翼乎。(入声職部C) 注飛雲嵎也。(平声魚部 c) ▲
- 45 將與雞鶩爭食乎。(入声職部C) ▲ 注啄糠糟也。(平声幽部?d)
- 46 此孰吉孰凶。(平声東部D) 注誰喜憂也。(平声幽部 d)
- 47 何去何從。(平声東部D) ▲ 注安所由也。(平声幽部 d) ▲<sup>60</sup>
- 48 世溷濁而不清。(平声耕部E) 注貨賂行也。(平声陽部\*耕部 e<sup>61</sup>)
- 49 蟬翼爲重。(平声東部○) 注近讒佞也<sup>62</sup>。(去声耕部 e) ▲
- 50 千鈞爲輕。(平声耕部E) 注遠忠良也。(平声陽部 f<sup>63</sup>)
- 51 黃鐘毀棄。(去声脂部○) 注賢隱藏也<sup>64</sup>。(平声陽部/去声陽部? f)
- 52 瓦釜雷鳴。(平声耕部E) 注愚謔訟也<sup>65</sup>。(平声/去声東部 f)
- 53 讒人高張。(平声陽部○<sup>66</sup>) 注居朝堂也。(平声陽部 f) ▲
- 54 賢士無名。(平声耕部E) 注身窮困也。(去声真部 g)
- 55 吁嗟默默兮。(入声職部○) 注世莫論也。(平声/去声真部 g)
- 56 誰知吾之廉貞。」(平声耕部E) ▲ 注不別賢也。(平声真部 g) ▲

<sup>55</sup> 前掲の魯端蓍論文 249～250 頁は、「涉江」の第 27 句注「山林草木茂盛」～第 30 句注「言暑濕泥濘也」の六字句を「介于散体与韻体之外另一種少数体例的积文形式」とする。前掲の黄繼堃論文 47 頁は「漁父」の注「不困辱其見也」・「隨俗方圓」等を、I 形式を外れた「格外的韻文注」とする。「卜居」では、前出の 12 および 40・41、57～63、66 の注が、厳密に言えば I b 形式を外れている。

<sup>56</sup> 黄著「身免憂患」。(中略) 黄本、夫容館本(中略)「憂患」乙作「患憂」。案：舊作「患憂」，倒文趁韻。作「憂患」，患字出韻。」(1882 頁) なお、底本は「清同治十一年金陵書局重刻汲古閣毛表校刊洪興祖楚辭補注」、黄本は「明正德黃省曾翻宋楚辭章句本」、夫容館本は「明隆慶夫容館翻宋楚辭章句本」である(第一冊、凡例 1 頁)。

<sup>57</sup> 黄著「冲天驅也」。(中略) 文選「區」作「驅」。案：(中略) 據義，謂冲天驅馳。舊本作「驅」。」(1882～1883 頁)。

<sup>58</sup> 羅著は、『詩經』音の侯部と魚部を兩漢では魚部に統合する(14 頁、20～22 頁)。前掲の陳鴻圖論文は、羅著とは異なり、魚部と侯部を分け、「卜居」注における魚部と侯部の同用の例として、42「區」(侯部虞韻)・43「徐」(魚部魚韻)・44「嵎」(侯部虞韻)を挙げ、「侯魚同用」とする(228～290 頁)。

<sup>59</sup> 黄著「安步徐也」。黄本、夫容館本(中略)「步徐」乙作「徐步」。案：安步徐，與上章句「冲天驅」，相對爲文。舊作「步徐」。(1883 頁)。

<sup>60</sup> 黄著は王注 42「驅」(侯韻)・43「徐」(魚韻)・44「嵎」(侯韻)・45「糟」・46「憂」・47「由」(以上 3 字は幽韻)を幽侯魚合韻とする(1885 頁)。

<sup>61</sup> 羅著、48 王注「行」は前漢では平声陽部に、後漢では平声耕部に属す。陽部と耕部の合韻は、注 27 を参照。「卜居」の 07 王注「明」への付注である。

<sup>62</sup> 黄著「近佞讒也」。文選本「佞讒」作「讒佞」。案：章句有「讒佞」，而無乙作「佞讒」者。(中略) 作「佞讒」，出韻。」(1885～1886 頁)。

<sup>63</sup> 羅著、東部と陽部の合韻は、前漢 11 例、後漢 16 例。前漢は陽東合韻 10 例(平声：187～188 頁)、東陽合韻 1 例(平声：180 頁)、後漢は陽東合韻 15 例(平声：189 頁)、東陽合韻 1 例(平声：180 頁)。

<sup>64</sup> 黄著「賢者匿也」。文選本「賢者匿」作「賢隱藏」。(中略) 案：作「賢者匿」，匿字出韻，舊作「賢隱藏」。」(1887 頁)。

<sup>65</sup> 黄著「羣言獲進」。文選本「羣言獲進」作「愚謔訟」。黄本、夫容館本(中略)作「羣言進也」。案：章句用三字句韻語，則作「羣言獲進」者，非也。作「羣言進」，進字出韻。舊作「愚謔訟」。」(1887 頁)。

<sup>66</sup> 53～56 は陽部と耕部の合韻となりうる。陽部と耕部の合韻は注 27 を参照。「卜居」の 07 王注「明」への付注である。

本文同士の押韻には、隔句韻が、36~41「○A○A○A」の六句三韻、48~52「E○E○E○E○E」の九句五韻と、複数の箇所に見える。また 42~47 は毎句韻であり、二句二韻が三連続で現れる。以上から、押韻は比較的緊密であると言える。

注同士の押韻には、声調を跨いで押韻する可能性がある部分が二箇所ある。48「行」は前漢では平声陽部に、後漢では平声耕部に属す。49「佞」は去声耕部である。よって注の 48 と 49 は、前漢ならば、平声と去声を跨いだ耕陽合韻、後漢ならば、平声と去声を跨いだ同部の押韻となる。また、54「困」は去声真部、55「論」には平声と去声があって共に真部に属す。56「賢」は平声真部である。この三字は、平声と去声を跨いで同部で押韻すると考えられる。

本文と注の関係はどうか。本文の換韻と注の換韻は、41、47、56 の三箇所一致する。43~45 は、本文が 43「述」と 45「食」で切れるのに対し、注は 44「岫」で区切れ、一致しない。

#### 第四段

- 57 詹尹乃釋策而謝、(去声魚部?/入声鐸部?○) 注愚不能明也。(平声陽部\*耕部 a<sup>67</sup>)
- 58 曰「夫尺有所短、(上声元部?○) 注騏驎不驟中庭<sup>68</sup>。(平声耕部 a)
- 59 寸有所長。(平声陽部 A<sup>69</sup>) 注雞鶴知時而鳴。(平声耕部 a) ▲
- 60 物有所不足、(入声屋部○) 注地陷東南虧<sup>70</sup>。(平声歌部\*支部 b<sup>71</sup>)
- 61 智有所不明。(平声陽部\*耕部 A) 注孔子厄於陳蔡<sup>72</sup>。(去声祭部 b) ▲
- 62 數有所不逮、(去声脂部○) 注天不可計量也。(平声陽部 c)
- 63 神有所不通。(平声東部 A) ▲ 注日不能夜光也。(平声陽部 c) ▲
- 64 用君之心、(平声侵部○) 注所念慮也。(去声魚部 d<sup>73</sup>)

<sup>67</sup> 前漢では 57 王注「明」は平声陽部に属し、「a」は陽耕合韻となる。後漢では「明」は平声耕部に属し、「a」は耕部同士の押韻となる。陽部と耕部の合韻については、注 27 を参照。「卜居」の 07 王注「明」への付注である。前掲の陳鴻圖論文(291 頁)は、「卜居」注における陽部と耕部の同用の 2 例目として、57「明」(陽部庚韻)・58「庭」(耕部青韻)・59「鳴」(耕部庚韻)を挙げ、「陽耕同用」とする。

<sup>68</sup> 黄著「騏驎不驟中庭。黄本、夫容館本(中略)「中庭」下有「者也」二字。若有「者也」,非章句六字句韻語。」(1890 頁)。

<sup>69</sup> 羅著、前漢では、61 本文「明」は平声陽部に属し、「A」は陽東合韻となる。前漢の東部と陽部の合韻は 11 例あり、陽東合韻 10 例(平声:187~188 頁)、東陽合韻 1 例(平声:180 頁)。後漢では、「明」は平声耕部に属し、「A」は陽耕東合韻となる。陽部と耕部の合韻は、注 27 を参照。「卜居」の 07 王注「明」への付注である。後漢の東部と陽部の合韻は 16 例あり、陽東合韻 15 例(平声:189 頁)、東陽合韻 1 例(平声:180 頁)。東部と耕部の合韻は、後漢に 1 例あるのみ(平声:197 頁)。東部・陽部・耕部の合韻は、後漢に陽耕東合韻 3 例がある(平声:190 頁)。

<sup>70</sup> 黄著「地毀東南。文選本「地毀東南」作「地虧東南角也」。案:「地毀」,當作「地虧」。淮南子卷三天文訓「昔者共工與顓頊爭爲帝,中略)地不滿東南,故水潦塵埃歸焉。」作「東南」或「東南角」,皆出韻。舊作「地陷東南虧。」(1891 頁)。黄氏が「陷」を補った理由は不明である。『文選』「地虧東南角也」の形に揃えたのであろうか。

<sup>71</sup> 羅著、前漢では、60 王注「虧」は歌部に属し、歌部と祭部の合韻は祭歌合韻が 1 例ある(平声:172 頁)。後漢では、「虧」は支部に属し、支部と祭部の合韻例は無い。

<sup>72</sup> 黄著「孔子厄於陳也。文選本「於陳」作「於陳蔡」。案:據義,舊作「於陳蔡」。」(1891 頁)。

<sup>73</sup> 羅著、魚部と宵部の合韻は、注 51 を参照。「卜居」の 36 王注「高」への付注である。之部と魚部の合韻は、前漢 5 例、後漢 12 例。前漢は之魚合韻 2 例(上声:130 頁)、魚之合韻 3 例(平声 2 例、上声 1 例、去声 1 例:150 頁)、後

65 行君之意、(去声之部B) 注遂本操也<sup>74</sup>。(平声/去声宵部d)

66 龜策誠不能知此事。」(去声之部B) ▲ 注不能決君之志也。(去声之部d) ▲

本文同士の押韻は、58～63 が隔句韻「○A○A○A」、64～66 が隔句と毎句の組み合わせ「○BB」である。

注同士には、声調を跨いで押韻しうる部分が一箇所見える。60「虧」と61「蔡」である。「虧」・「蔡」はともに、黄著が『文選』を参照して復元した押韻字である。60「虧」は、前漢では平声歌部に属し、後漢では平声支部に属す。61「蔡」は去声祭部に属す。したがって注 60・61 は、前漢では平声と去声を跨いだ歌祭合韻となるが、後漢では支部と祭部との押韻例がないため、押韻するとは見做し難い。注 60・61 の部分は、前漢で成立したと考えられる。

本文と注の関係は、以下のようなものである。

第一に、57・58 において、本文の叙事と登場人物の言葉との境目と、注の換韻箇所は一致しない。この現象は第二段 13・14 と同様である。

第二に、本文の換韻と注の換韻は、63 と 66 の二箇所では一致する。

#### 4 おわりに

「卜居」本文と注を「両漢韻譜」を用いて調査した結果、以下の事柄が判明した。

本文同士の押韻に関して、登場人物の言葉は押韻するが、それ以外の叙事の部分は無韻である。毎句押韻は 09・10、11・12、42・43、44・45、46・47 が「AA」形式の二句二韻、22～25 は「CD CD」形式である。隔句韻は、14～17、18～21 が「○A○A」形式の四句二韻、36～41、58～63 は六句三韻「○A○A○A」、48～56 は九句五韻「E○E○E○E○E」形式である。隔句と毎句を組み合わせたものには、26～30、30～35 の「○B C C B」形式、64～66 の「○B B」形式がある。

毎句押韻の「AA」と「BB」の連続や、「CD CD」、「○E F F E」は、押韻が緊密である。これらのうち「CD CD」や、「○B C C B」と「○E F F E」が連続する部分は、相似形が反復する複雑な押韻形式といえる。「離騷」など古い時代に成立したとされる『楚辞』作品が四句

漢は之魚合韻 4 例（平声 1 例、上声 3 例：131 頁）、魚之合韻 8 例（平声 1 例、上声 7 例：152 頁）。宵部と之部の合韻は、前漢・後漢ともに例が無い。魚・宵・之の合韻は、後漢に魚宵歌之の四部合韻が上聲 1 例ある（152 頁）。

<sup>74</sup> 黄著「遂本志也。黄本、夫容館本（中略）「操」作「志」。案：操，操守也。本操、本志同。作「本志」，與章句下「君之志」複。」（1894 頁）。

二韻を基調とするのとは、大いに異なっている。

注同士の押韻には、以下のような特徴が見える。

第一点、04～06、48・49、54～56、60・61は、声調を跨いで押韻する可能性がある。これらの例は全て平声と去声に跨る例である。少なくとも「卜居」注に関しては、羅著が言及していない平声と去声の押韻を認めても良いのではないだろうか。両漢における声調には『広韻』とは異なる場合もあるため、声調の問題については専門家の批正を乞いたい。

第二点、60「虧」は黄著が復元した押韻字であるが、この復元に従った場合、60「虧」と61「蔡」の押韻は前漢で成立したと考えられる。

本文と注との関係には、次のような特徴が見られた。

第一に、「卜居」注には、本文一句に対し四字二句のⅠa形式と、四字一句のⅠb形式の両方が見えるが、Ⅰa形式は本文冒頭の三句に対してのみ現れ、残りはⅠb形式である。Ⅰa形式とⅠb形式の境目は、本文の叙事と登場人物の言葉との境目と一致しない。「遠遊」では、Ⅰa形式の注が本文の一般的な叙事の部分に付され、Ⅰb形式の注は神仙の聖なる教えに対して付される。しかし「卜居」では、「遠遊」のような注の使い分けは認められない。

第二に、「卜居」注の大半を占めるⅠb形式の注は、単独で朗読しても意味を成さないため、小南氏の説のように本文と組み合わせて朗読する必要があると考えられる。本文と組み合わせて朗読した場合に、どのような現象が起こるかを、以下の第三から第六に挙げる。

第三に、本文は22～25「C D C D」、27～30「O E F F E」、31～35「O B C C B」のように複雑な押韻形式を持つ箇所があるのに対して、この箇所に対応する注の押韻は十七句連続押韻であり、本文と同調していない。よって本文と注を続けて読むならば、注の押韻が本文の複雑な押韻の印象を弱め、本文の押韻効果を減殺することになる。

第四に、本文の叙事と登場人物の言葉の境目と注の換韻箇所は、13・14、57・58で一致しない。これは注が13「屈原曰」のような叙事の一句にも付き、なおかつ、登場人物の言葉に付された注と押韻しているからである。

第五に、本文の換韻と注の換韻とは、一致する部分と一致しない部分の両方がある。一致するのは35（第二段の終わり）、41、47、56（第三段の終わり）、63、66（第四段の終わり）である。第一段から第四段の段落分けは、本文と注の換韻箇所が一致する部分を優先して、本文の句読の境目と、適当な分量とを勘案して区切った結果、上記のようになった次第である。換韻が一致しないのは09・10、17・18、43～45である。本文の換韻と注の換韻が一致する箇所では、



注が本文の押韻を補強する効果があるのだろう。他方で、不一致の箇所では注が本文の押韻の効果を弱めかねない。

以上のうち、第二では、I b 形式の注は朗誦するのに本文と組み合わせる必要があると考えられたが、第三では、注の押韻が本文の複雑な押韻の効果を弱めてしまう部分があり、第五で本文の換韻と注の換韻が一致しない箇所では、注が本文の押韻を弱めかねないことが分かった。

「卜居」注は、朗誦するには本文と組み合わせる他ない I b 形式を主体としながら、本文と組み合わせると部分的に本文の押韻を弱めてしまう、という特徴を持っているのである。すると、小南氏による、注を本文と組み合わせて朗誦するという説には、少々疑問が生じる。

本文の境目と注の換韻が一致しない箇所をどのように考えればよいだろうか。注を製作した時点で、本文の押韻や句読を軽視していたことや、製作者の押韻の技量が低かったことに帰すこともできる。あるいは魯瑞蓀氏が指摘するように、『章句』は散逸と後人の増補によって体裁が混乱したと考え、注の換韻と本文の境目の不一致も、混乱した体裁の一例であると捉えることが可能かもしれない。

しかし、「卜居」では不一致の箇所が少なからず見え、単に体裁が混乱したためとは考えにくい。もし不一致に積極的な意味合いを認めれば、注の製作者は、本文の句読や一定の分量ごとに、注の換韻を本文の換韻と一致させ、それ以外の所では寧ろ注の換韻を本文の句読や換韻とは意図的にずらし、連綿と続くようにした、とすることができるかもしれない。そのような押韻と朗誦の技法があったのであろうか。

『章句』における韻文形式の注、とりわけ I b 形式の注の特徴を明らかにするには、I b 形式の注を持つ残りの三篇「遠遊」・「漁父」・「招隠士」も検討する必要があるが、これらについては、今後の課題としたい。

本稿は、桃の会例会（2017 年 9 月）および 2017 年中国昆明屈原及楚辞学国際學術研討会暨中国屈原学会第十七届年会（昆明・雲南大学、2017 年 11 月）における研究発表を基に改訂したものである。ご教示くださった先生方に感謝申し上げます。

本稿は、平成 30 年度科学研究費補助金 基盤(C)「伝統的『楚辞』解釈の再検討」(17K02635)による成果の一部である。